カナダの農業

カナダは、国土の大半が耕作に適していないという条件があるにもかかわらず、良質の土壌と良好な自然環境、それに勤勉な農家と熱心な農業研究のおかげで、数々の立派な農産物を生産し、それを国外に供給する農業大国となっている。

世界の諸市場に向けて食糧を供給する――これはカナダの農業がめざしてきた大きな目的である。

昨年、政府が発表した今後の農業・食糧戦略にも、この点は色濃く反映されている。国内外の市場に、安定した食糧供給を続けるために、われわれの政策目標をどう設定すべきか――というのが、この基本戦略の骨子である。

農業の分野で、カナダは数多くの立派な業績をあげてきた。カナダにおける農業のさまざまな側面と、こうした業績の一部を皆さんにご紹介したい。

農務大臣　ユージン・ウェーラン

世界的な農牧国
四つの地域で多様な産物

農業は、カナダ経済の四分の一の比重を占め、資源産業や先端技術産業とともにカナダの重要産業となっている。農地面積は、十州全体で約六千五百九十万ヘクタール、農家数約三十二万戸、現金収入総額百億ドル（七七年）、輸出高八十八億ドル（カナダの輸出全体の約一割）。農業人口が労働人口全体に占める割合は四・六パーセントにすぎないが、高度に機械化、商業化されているため、高い生産性をあげている。

気候と土壌、そして地勢の違いによって、カナダの農業地帯は、四つに大別できる。大西洋岸諸州と中央カナダでは沿岸地帯と川の流域を中心とし、肥沃度は地域によってさまざまである。平原地方は、肥えた土壌と少ない降水量を特徴とする。太平洋に近い山岳地方では、農地は高原と盆地に限られている。

平原三州――最大の農牧地帯

カナダの大平原地帯、アルバータ、サスカチュワン、マニトバの三州は、全国農地の七五パーセントを占め、カナダにおける農業、畜産業の中心となっている。

気候は決して温順とはいえない。冬は長くて寒さも厳しい。夏は高温で日照時間が長い。降雨量は少なく、雪もあまり降らない。こうした気候と肥沃な土壌が、粒の赤い硬質春小麦の大規模栽培にぴったりの条件を作り、平原州といえば、一面の小麦畑を連想させるほど、小麦の大産地となった。畜産・酪農もこの地方の主要農産部門で、広い牧場や牧草地が各地に点在している。また、なたねなど油糧種子の生産でも、平原諸州は有名になりつつある。

カナダ産小麦は、そのほとんどが平原諸州でとれたものである。とくにパンの原料に最適で、世界にこの種の小麦の産地がほとんどないため、平原諸州でとれる小麦の七五パーセントが輸出されている。

カナダ産穀物としては、小麦のほか大麦、からす麦、ライ麦、コーンも重要。主にオンタリオ州でとれるコーンを別とすれば、これらの穀物もすべて平原三州が主産地である。

穀物農家の平均農場面積は、約五百ヘクタールという大規模なもので、機械化、近代化が非常に進んでいる。厳しい気候のために、生産高こそ他国に一歩譲るが、経営規模の大きさと、穀物の品質の良さで、平原産穀物の国際競争力は、きわめて強い。

平原産小麦の集荷販売は、カナダ小麦局という公的機関が一手に引受けている。カナダ小麦局は、小麦の州間取引きや海外輸出も行っている。

平原地方で栽培されている油糧種子には、食用としてなたね（キャノーラ）、ひまわり、からしの三種類、それに工業用油糧種子として亜麻仁がある。

ここ数年、カナダが良質ななたねの生産国として急成長してきた裏には、長年にわたる改良・開発努力があった。その結果生まれた低エルシン酸、低グルコシノレートのキャノーラ種は、今やカナダに

「世界のパンかご」として知られる大平原の穀倉地帯。手前はグレーン・エレベーター（穀物貯蔵庫）。